子どもの豊かな感性・思いやり・協調性を育む　自然とのふれあいを大切にする

# ドイツの園づくりツアー 2017

## 実施レポート

日　程　2017 年６月 25 日（日）～７月１日（土）
視察地　ドイツ　ベルリン、ポツダム
参加者　21 名

子どもたちの心とからだの成長は、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで促されます。「園庭ビオトープのある園」は乳幼児期の子どもたちが、豊かな感性や思いやり、協調性、創造力などをはぐくむ場所として最適な環境です。そうしたことから、保育・幼児教育と自然・環境の重要な関係性が日本でも認識されはじめています。

ドイツにおける自然とのふれあいを促す取り組みをご紹介するため、本ツアーでは、首都ベルリンとポツダムを訪れ、ベルリン教育省・青少年・科学省にて、教育プログラムについてレクチャーを受けた後、７か所の園を訪問し、環境 NGO や自然景観設計士、保護者とともにつくられた園庭ビオトープなどを見学しました。併せて、インクルーシブ保育や保護者との連携の動向などについてもお話をうかがいました。これはその実施レポートです。

視察企画：（公財）日本生態系協会
後　　援：（社福）日本保育協会、（公社）全国私立保育園連盟
　　（NPO 法人）全国認定こども園協会、日本ビオトープ管理士会
協　　力：（株）チャイルド本社、ひかりのくに（株）、（株）メイト

# 自然とのふれあいを大切にするドイツの園づくりツアー2017 訪問先


1. ベルリン教育・青少年・科学省　P3
   6 月 26 日（月）

2. 保護者と子どもの保育所・幼稚園エネメネモペル　P5
   6 月 26 日（月）

3. 森の幼稚園　アプフェルボイムヒェン　P7
   6 月 27 日（火）

4. AWO 保育所・幼稚園キンダーヴァルド　P9
   6 月 27 日（火）

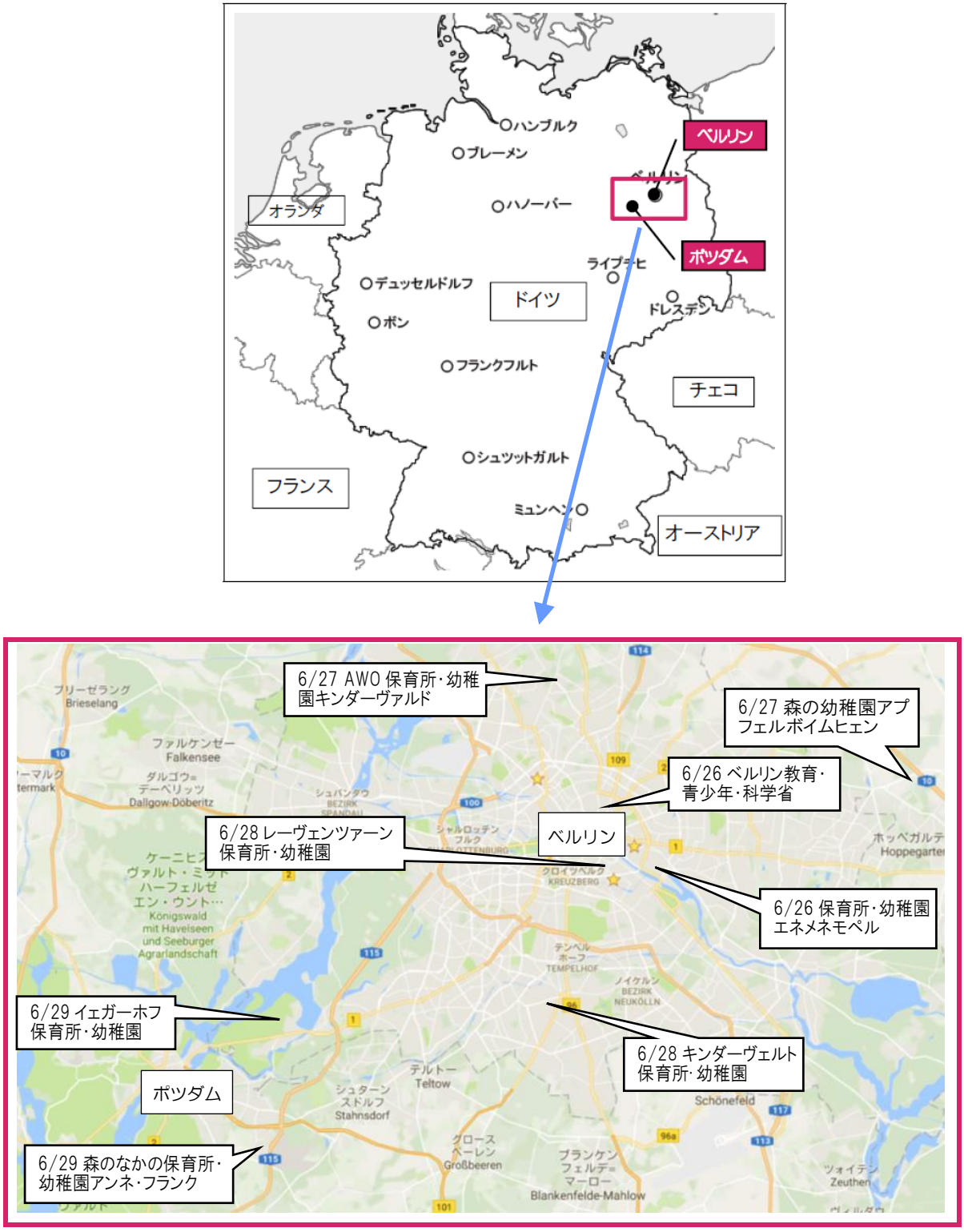
5. レーヴェンツァーン保育所・幼稚園　P11
   6 月 28 日（水）

6. キンダーヴェルト保育所・幼稚園　P13
   6 月 28 日（水）

7. アム・イェーガーホフ保育所・幼稚園　P15
   6 月 29 日（木）

8. 森のなかの保育所・幼稚園アンネ・フランク　P17
   6 月 29 日（木）

自然とのふれあいを大切にするドイツの園づくりツアー2017 訪問地の位置




Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# ベルリン教育・青少年・科学省

## 「園庭に自然とふれあえる場所を設けることが“不可欠”」

1990 年のドイツ再統一によりドイツ連邦共和国の首都となったベルリンは、ベルリン特別市またはベルリン州とも表記され、一市単独で州としての機能と権限を有する都市となりました。ベルリンには、「ベルリン特別市保育所・幼稚園・託児所のための教育プログラム」（2004 年設置、2014 年改訂）があり、市内の保育所や幼稚園では、このプログラムに沿った保育や幼児教育が行なわれています。

ベルリン教育・青少年・科学省では、視察の手始めに、この教育プログラムについて、2014 年の改訂作業に携わられた教育プログラム・教育の質向上・言語教育局長のホウトゥムーグリューンベルク氏よりお話をうかがいました。

ベルリン教育・青少年・科学省が考える「教育」とは、子どもにも分かるかたちで「世界」というものについて教え、物事に対する正しい価値観を養わせることだとしています。また、「社会」とのつながりも重要で、保護者・子ども・保育者の良好な関係があってこそ、行き届いた教育や保育が可能となるとしています。このことから、ベルリン教育プログラムには、保育･幼児教育のあるべき姿にとどまらず、保護者との協力関係などについても盛り込まれています。

ベルリン教育・青少年・科学省のホウトゥムーグリューンベルク氏（左）

「ベルリン特別市保育所・幼稚園・託児所のための教育プログラム」（2014 年改訂版）の表紙（右）

「木」をテーマにしたプロジェクトの展示（下）

ベルリンの教育プログラムには、保育・教育の 6 つの要素として、「健康」「社会的・文化的生活」「コミュニケーション：言語、読み書きの能力、メディア」「芸術：絵画・創作・音楽・演劇」「数学（算数）」「自然・環境・技術（テクニック）」が示されています。

現在、ベルリンでは移民や難民の数が増えており、その多くがドイツ語を十分に話せません。そうした親に育てられた子どもは、ドイツ語のみならず母国語においても言語の確立や思考が困難となり、そのことが子どもの将来を左右することにつながっています。難民の子どもたちにも平等な機会の提供が可能となるよう、ベルリンでは言語教育に力を入れています。

同様に、自然体験も重要視されています。子どもたちが健康であるためには、元気に思い切り動き回れる場所が必要です。しかし、大都市ベルリンでは、広大な自然に簡単にアクセスすることはできません。しかし、自然豊かな園庭があれば、毎日の自然とのふれあいが可能になります。ベルリンでは、保育所・幼稚園の園庭に自然とふれあえる場所を設置する、自然とふれあう機会を設けることが“不可欠”なこととなっています。市街地の園のなかには、地価が高く、十分に広い園庭をもつことができないところもあります。ありがたいことに、ベルリンには、野草の茂る草原やこんもりとした森のある自然豊かな公園がたくさんあります。園庭ビオトープがない園では、近くの自然豊かな公園などに出かけて子どもたちを遊ばせています。

多くの園では、年に２回ほど独自のプロジェクトを実行しています。テーマは子どもたちとの話し合いにより決められます。例えば、「木」をテーマにしたものでは、鉢植えや落ち葉、木を題材にした絵本の展示や、森に住んでいると言われている魔女の人形も飾られました。プロジェクトは、教育プログラムの６つの主要要素が盛り込まれるようデザインされています。

人口が増加しているベルリンでは、増える子どもたちに保育所・幼稚園の数が追い付かず、希望しても入園できないというケースが少なからずあります。また、保育者の数も不足しています。ベルリン市では、保育・教育の内容とともに、こうした状況の改善にも力を注いでいます。

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# 保護者と子どもの保育所・幼稚園エネメネモペル

## 「自然豊かな園庭は常に成長し続けるもの」

この園では、保護者と子どもの園という名称のとおり、保護者や子どもたちが参加して園庭づくりを行ないました。訪問時には、園長のハウザー氏に加え、2008 年に園庭改善の取り組みに踏み切った元園長のフォイヤーゼンガー氏、それを支援した自然豊かな園庭づくりの専門家、自然景観設計士※のハイネ氏も同席くださり、こだわりの園庭についてお話をうかがいました。

ベルリンの中心から東に約 8km 場所に位置するエネメネモペルは 1990 年に創設され、現在 1 歳から就学前の 6 歳までの子どもたちが通っています。園庭には、野草が咲く茂みや灌木、大きな木などの自然の要素のほか、小高い丘の斜面を利用した滑り台、天幕付の砂場、ネットブランコなどがあります。遊具のほとんどは保護者の手を借りて取り付けられました。

2008 年に開始した園庭づくりのプロジェクトは 10 年目を迎えた今年、おおよそ完成の予定です。計画図の段階からみんなで話し合い、工夫しながら一つひとつつくり上げてきました。時間はかかりましたが作業は楽しいものでした。

※自然景観設計士は、人と自然が調和した、生きものに優しいトータルな景観設計を目指して、土地利用・植栽デザイン、管理などを行なう自然豊かな環境づくりの専門家のこと（日本でいうビオトープ管理士）

木を囲んでお話を聞きました（上）

協会ヨーロッパ事務所長の通訳に耳を傾ける子どもたち（右）
向かって左が新園長ハウザー氏
右が自然景観設計士のハイネ氏

元園長のフォイヤーゼンガー氏（上）

園庭内に生える木は大小全て在来種です。元から生えていた巨木はそのままに、他の木は在来種の実を植えて育てました。木の大きさによって、集まってくる野鳥や昆虫も異なります。いろいろな野生の生きものとのふれあい、つまり生物の多様性を子どもたちも楽しんでいます。

木の剪定などは積極的には行なわず、枝が枯れたりして落ちる可能性がある場合のみ、子どもの安全性を考えて取り除きます。虫の駆除も行ないません。園内には、トゲのある野生のバラもあれば、刺す虫もいます。しかし、それらを取り除くことは敢えてせず、彼らにも生命があり、生きるための営みがあることを教えています。

子どもたちは、野生のバラのそばを通りトゲが刺さることもあります。また、虫を手にとり観察していて、刺されたりすることもあります。しかし、そうした経験を経て、実体験から様々なことを学び、注意して行動するようになります。

視察の最後に、元園長のゼンガー氏から感慨深い言葉を聞くことができました。「自然豊かな園庭には完成形というものはありません。生きている草や木は成長し常に変化し続けています。この育つという状況を大切にしなければなりません。心の声に動かされ、私たちは、保護者とともにこの自然豊かな園庭づくりを始めました。満足してその声がなくなるまで私たちの園庭づくりは続きます。」

心の声を大切にして、地域の生きものたちと共存できる環境づくりをしていくことが大切なのだと学ばされました。そうしてできた園庭が子どもたちだけでなく、保護者や地域の人々に愛されていることは言うまでもありません。

園庭の大きな木は心地よい木陰を提供してくれる

有害物質検査が行なわれているさらさらした砂場の砂（左）

馬のような形をした木の小屋
子どもだけの秘密の場所（下）

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# 森の幼稚園アプフェルボイムヒェン

## 「子どもたちだけではなく保育者の成長も促す環境」

「イーゲルはハリネズミという意味なの！」と園長

遊びの拠点を森の中に置き、園舎をもたず一日の大半の時間を森で過ごす「森の幼稚園」は、近年、日本でも注目を集めています。視察２日目の朝は、ベルリンの中心から東に約 20km、ブランデンブルク州のノイエンハーゲン地区にある「森の幼稚園アプフェルボイムヒェン」（「リンゴの若木」の意）を訪れました。園長のイーゲル氏をはじめとした保育者の方々の歓迎を受け、子どもたちに混じって森での遊びを共有しました。

2002 年に保護者によるイニシアティブで創設されたこの園には、２歳から６歳までの子どもたち 22 名が通っています。9 名のスタッフのなかには自然教育などを専門に学んだ方が多く、しっかりとした保育・教育基盤に沿って、環境意識や自然への理解が深まるような指導を行なっています。

草原が混在する森の一角に到着すると、子どもたちは車座になって、朝の挨拶やお話、歌を歌ったりするモーニングサークルの最中でした。ドイツ語と日本語で挨拶を交わした後、保育者の一人から「ネズミがダンスをするお話」が披露され、子どもたちは興味深げに耳を傾けていました。その後、日本人グループが「カエルの歌」を輪唱すると、そのお礼に子どもたちがドイツの「カエルの歌」を歌ってくれました。

モーニングサークルが終わると、子どもたちは方々に散らばって思い思いの遊びを始めました。

モーニングサークルの様子

森のなかには、ハンモックや、木でできたティピもあります

自然の素材でコラージュを作る子、木に吊られたハンモックに寝てみる子、それをゆすってあげる子、倒木によじ登る子、嬉々として森に住む魔女のお話をする子、花を摘む子、虫を拾っては手渡してくれる子など様々です。雨の日でもレインコートと長靴で遊びまわっているそうです。

広大な森ですが、子どもたちは自由に行ってよい範囲を知っています。そのため、いなくなったり危険な目に遭ったりすることはないそうです。森のなかには、キツネの寝床やイノシシが寝転がった跡などもあり、まさに、野生の生きものの息吹が身近に感じられる環境でした。

この園で働くには特別な教育・資格は要りませんが、自主的に勉強をする人が多いようです。園長のイーゲルさん自身も、一般の教育課程を経てこの園に入り、その後、植物学を勉強しました。他にも、自然教育の特別な資格を取得した人や、生物学を専門に学んだ人もいます。この森の幼稚園は、子どもたちの成長だけではなく、保育者の成長も促すような環境となっています。

草の中を分け入っていく子どもたち。
その後ろにはけもの道（上）

「ここ見て！」（左上）

枯れ木の上を歩く子どもたち。
挑戦することで注意深さが身につき、平衡感覚などの身体能力も養われる（左）

「この実は食べても大丈夫なんだよ。
赤いのを探してあげるね」（左下）

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# AWO 保育所・幼稚園キンダーヴァルド

## 「子どもたちがすぐに園庭に出られる工夫」

「AWO 保育所・幼稚園キンダーヴァルド」（「子どもの森」の意）は、ドイツ労働者福祉財団（AWO）ベルリン中央地区協会が運営しています。AWO ベルリンは、高齢者施設や障害者施設など 45 か所を運営しています。ベルリンの中心部から北に 11km の工業地帯にあるこの園では、年齢・障害の有無・文化や言語の違いなどに関わらず一緒に遊ばせる「インクルーシブ保育」を実践しています。生後 8 週間から 6 歳まで、約 100 名の子どもたちに対して、保育者 18 名で対応しています。そのうち 5 名が男性です。男女平等が叫ばれるなか、男性保育者は増加傾向にあります。力のある男性職員の存在は園庭づくりにも役立っているそうです。

AWOベルリン所長のアンゲリカ氏とキンダーヴァルドの園長シュタインクラウス氏の案内で、力を入れている食育と菜園、園庭ビオトープのポイントなどについてお話をうかがいました。

アンゲリカ氏（左）とシュタインクラウス氏（右）

園舎内は柔らかいトーンの柑橘系と緑色で統一されていました。
葉っぱのかたちの赤ちゃん用ベッド（左）、お昼寝用のロフト（上）、子ども用の洗面所（右）

大きな木に囲まれるような園庭の一角に、生態学を専攻する学生と子どもたちが作った菜園があります。植物学を学んだ保育者が子どもたちに野菜とそれ以外の植物について教え、菜園の管理をしています。時折小さい子どもが、誤って野菜を抜いてしまうこともありますが、学習プロセスの一部として、できる限り自由にさせています。育った野菜や果物は子どもたちが自由に食べてよいことになっています。スタッフが調理して子どもたちに提供することもあります。

自由に食べてよいとは言うものの、食物アレルギーの問題は気になります。しかし、子どもたちは、保護者からアレルギーがある食べ物について教えられており、3 歳くらいになるとその意

味を理解し、食べないようになるので、基本的に本人に任せています。万が一口にしてしまった場合には、保育者が経過観察を行いつつ保護者に知らせるなど、速やかに対応できるよう体制が整えられています。

菜園のそばには、堆肥づくりに欠かせないコンポストがあります。子どもたちも積極的にコンポストづくりに参加しています。園庭の端には、園庭ができる前からあるいろいろな植物がブッシュのように生えた場所があります。2 年半前この園庭が設置された際、街中で暮らす子どもたちに少しでも身近な自然にふれてもらうという目的で残しました。イラクサなどトゲがある植物もありますが、子どもたちはそれらの植物の対応の仕方を学習しています。砂場が 2 つありますが、砂場を造る時に掘って出た土を、処分せずに積み上げて小高い丘をつくりました。今は子どもたちの人気のスポットです。また、色々な自然の素材の上を裸足で歩く小道は、現在お休み中ですが、木の幹や皮などを足して近々リニューアルする予定です。

園舎の各部屋には、子どもたちがすぐに園庭に出られるよう園庭に面した部分に出入り口が設けられています。園庭で遊ぶ子どもたちの様子が室内からでもよく見えるよう、窓も大きくしてあります。私たちが視察している間も、活発な子どもたちが頻繁に園舎と園庭を行き来している姿が見られました。そうした取り組みに保護者も大変満足しています。

菜園にはズッキーニやルバーブが元気に育っていました

木陰に積んだ枯れ枝も、昆虫たちのビオトープ（下）

園庭にすぐに出られるよう園舎内の各部屋にドアが付いています

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

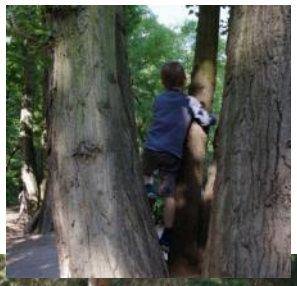
# レーヴェンツァーン保育所・幼稚園

## 「強い子に育てるには清潔すぎない環境がよい」

日本語でタンポポという名前をもつこの園は、ハナ社という花屋さんが 1995 年に創設しました。0 歳から 6 歳までの 120 名の子どもたちを、レーヴェンツァーン保育所・幼稚園協会のスタッフ 18 名で対応しています。園長のクラウゼ氏より、隣の園と共同で使っている約 3,350 ㎡の園庭を巡りながらお話をうかがいました。突然、怖がる様子もなく木から降りてきた野生のリスに、自然とのふれあいを実感することができる視察となりました。

首都ベルリンの中心から 2.5km の位置にあるこの園は、大都市にありながら、毎日の自然体験を保育コンセプトのトップに掲げ、自然いっぱいの園づくりに力を入れています。学校・園庭ビオトープづくりを支援する NGO「グリューンマハトシューレ」の協力を得て、日々の遊びのなかで自然体験ができる園庭につくり変えました。2005 年に計画を立て、翌年に作業を始めました。改善前の園庭は何本かの木は生えていたものの、平面的でコンクリートに覆われていました。そこで、まずコンクリートをはがすことから始めました。そして、より活発に遊べる場所にするために、小高い丘をつくるなど、多様な地形に変えました。子どもたちには自然のものを使って独自の遊び道具を発明してもらうため、遊具もあまり置かないことにしました。

園庭には、地域在来の野草が生えた斜面や、木登りのできる木、かくれんぼに最適な茂みや低木、リンゴや洋ナシ、クルミなど、果実や木の実がなる木もあります。腐ったり枯れたりした木を重ねて置いた昆虫のビオトープにはたくさんの虫たちが暮らしています。園庭で実ったものは自由に食べることができます。子どもたちだけでなく、多くの野鳥、ほ乳類、昆虫もそれを目当てにやってきます。子どもたちが野生の生きものに危害を加えることはないので、リスは安心して地面に降りてきますし、クロウタドリも巣作りをします。夜には時々キツネもやってきます。



駐車場も野草が生えていました（上）

木の枝を重ねた昆虫のビオトープ（上）

松の低木はかくれんぼと木登りにぴったり。てっぺんがツルツルになっていました（左）

園庭には病気で枯れてしまったリンゴの樹があります。子どもたちはなぜ枯れたのか不思議に思い、周囲の土に原因がないか、幹に虫がついていないかなどを調べました。その結果、「木も生きていて、最後には死ぬのだ」という結論に達しました。枯れた樹にはそれが好きな野鳥や昆虫がやって来ます。そうした多様な生きもののためにそのまま残しています。

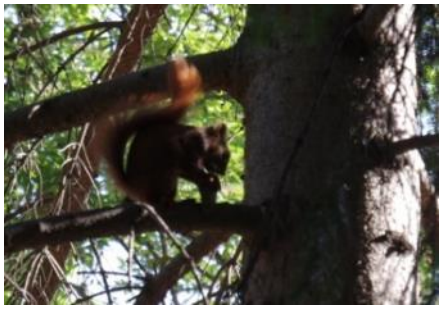
ドイツでは、清潔すぎる環境が子どもにマイナスの影響を与える可能性があることから、日本に比べて衛生面について寛容です。この園でも食事の前には手を洗うように習慣づけてはいますが、泥遊びをしたその手で食事をしても、免疫を高める過程と捉え、とがめることはしません。また、園庭には石などが点在し、木登り用の木もあります。擦り傷、切り傷をつくることで、子どもたちはけがをしないよう注意し、工夫します。けがを心配してそうしたものから遠ざけてしまうのは、子どもの成長の道理にかなっていないとのことから、敢えてそのままにしています。

園では、過保護にしないことが、子どもたちの体験とそれによる学びを促すと考えています。その考えは、保護者からも全面的に支持されています。

枯れたリンゴの樹は、
今も滑り台の隣にあります（上）

砂場では、時折キツネの落とし物が見つかるものの毎朝掃除しているので問題ありません。自然保護団体によると、キツネの糞に子どもの健康に影響を与えるような成分はないといいます（上）

遊び道具は自分たちで小屋から出します（右）



Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# キンダーヴェルト保育所・幼稚園

## 「都会のオアシスのような園庭」

ベルリンとポツダムの中間に位置するこの園は、キンダーヴェルト協会が運営しており、0 歳から 6 歳までの子どもたち 43 名が通っています。そのうち 3 名が障害のある子どもです。インクルーシブ保育を実践しているこの園には、社会教育士、社会福祉士などの専門資格を有するスタッフが 6 名います。また、保護者と密に連携して園づくりを行なうことを奨励するベルリン市の取り組み「保護者イニシアティブ」の実施園でもあり、保護者は日常的に来園して、園での様々な活動やイベントの計画・運営に参加しています。視察時は、ディアネ氏をはじめとしたスタッフの方々にご協力いただき、園庭と園舎をご案内いただきました。

園舎は集合住宅の 1 階にあり、建物に囲まれた園庭は小さめですが、高低差のある変化に富んだ楽しいデザインが、敷地の狭さを十分カバーしてくれています。園庭ビオトープづくりを始める前の園庭は遊びの可能性に乏しく、子どもたちは外遊びに消極的でした。そこで、園のスタッフと保護者が協力して、「園庭改善プロジェクト」を立ち上げました。計画づくりには自然豊かな校庭や園庭づくりを行なう NGO「グリューンマハトシューレ」の助けを借りました。まず、小山をつくり、そこに地域在来の低木や野草を植えてビオトープをつくりました。さらに、木登りや岩登りの場所、垣根や小道、虫宿、かくれんぼの場所、トンネルなどを加えていきました。保護者との密な連携により園庭ビオトープづくりの作業は、思いのほか早く進みました。園庭にはたくさんの野鳥のほか、リスやハリネズミなどのほ乳類も暮らしています。

園庭の中央には、草木に覆われた小山があり、斜面の木々の間にはトンネルや滑り台、足下には地域在来の夏の草花が咲き誇っていました

天候にかかわらず、子どもたちは毎日２時間以上外で遊ぶようにしています。紫外線が気になる時は、木陰で遊んだり、パラソルを使ったりして対策をしています。保護者のアイディアで野外に設けられたグリーンルームは、蔓植物などによる緑化で半日陰になっており、子どもたちの声も植物に吸収されるため、上の階の集合住宅への騒音対策にも役立っています。自然とのふれあいは園舎内でも行われています。室内でも観察できるように色々な場所に野の花を飾っています。ケースで飼育しているカタツムリは子どもたちに大人気です。

自然の採光が柔らかい雰囲気を醸し出す室内からは、大きな窓を通じて、緑が輝く園庭がよく見えます。
雨の日の外遊びのため長靴は欠かせません

五感を使った遊びを大切にしているこの園では、そのための工夫も随所に見られます。園庭の一角に張った自然素材の綱は障害のある子の助けになると同時に、触ってその感触を楽しむためのものです。松ぼっくりを集めて来て、敷いたり触ったりして遊ぶ場所もあります。また、菜園にある唇の絵は、「ここは味わう場所」と子どもたちに認識させます。室内でも、段差を設けたり、多様な内装素材を使ったりして、子どもたちの感覚を刺激するようにしています。

スタッフの一人が、「職場を選ぶ際に、都会のオアシスのような園庭のある所で働きたいと思い、この園に来ました」と幸せそうに語る姿が印象的でした。子どもたちはとても人懐こく、物怖じすることなく私たちを遊びに誘ってくれました。熱意のあるスタッフと保護者がつくった園の環境がそうした明るく快活な子どもを育んでいると実感しました。日陰でいただいた、スイカやブドウ、サクランボなどの果物の味は、さわやかな感動とともに、また格別でした。

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# アム・イェーガーホフ保育所・幼稚園

## 「四季折々の自然の変化を体験から学ぶ」

この園は、2011 年「人と人、自然と人とのつながりを大切にする」をモットーに、ナトゥア・クルトゥアグート・イェーガーホフ社によって創設されました。この園は、絶滅に瀕する多様な野生の生きものへの保護意識を幼少期から育むことをねらいとして、ドイツ政府が全国規模で展開する「保育所・幼稚園の園庭で一緒に多様性を発見しよう」プロジェクトに参加しています。園庭の生物多様性や自然体験についての情報交換や交流を目的に、プロジェクトの一環で設置されたネットワークには、全国 200 カ所以上の園が参加しています。

この園は、ポツダムの北東約 7km、森や湖が点在するユネスコ世界文化遺産地区に位置しています。周囲を森に囲まれ、景観的にとても恵まれた環境です。視察中も猛禽類が空を舞い、豊かな自然を感じさせてくれました。それもそのはず、1830 年代このあたりは狩り場で、この園舎は、城の建築家として有名なデシンケルが建てた狩人の家でした。アム・イェーガーホフ保育所・幼稚園は、オーナーである自然文化狩猟財団から敷地と園舎を借り受けています。

ハーフェル河畔の 7,000 ㎡の敷地には、森や草原が広がっています。自然とのふれあいをコンセプトとした保育を実践するこの園では、野外での五感を使った自由な遊びを奨励しています。お話をうかがった園の代表のトゥラッハ氏によると、そのためには、まず保育者と子どもたちとの信頼関係を築くことが大切だということです。森の中で迷っても、信頼できる保育者の言うことを思い出せば、落ち着いて行動できるからだそうです。

巨樹に囲まれた園庭（上）
小枝などを木の枝を重ねた昆虫のビオトープ（右上）
昼食をとる木陰のスペース（右）

子どもたちは、そこにあるものを使っていろいろな遊びを考え出すので園庭に遊具はありません。カタツムリやミミズも楽しい遊び相手です。枝があれば、それを馬に見立てて乗ったり、野球のバットにするなどして遊びます。保育者は、時折、「それは何？」「どんな遊び？」と質問します。そうした質問が子どもたちの探究心、好奇心を刺激し、脳の発達も促すからです。また、広い敷地のなかで活発に動き回ることで、運動神経の発達にも大きく貢献しています。街中のような騒音のない静かな環境で、子どもたちは遊びに集中することができます。

豊かな自然とふれあって毎日遊んでいるので、この園の子どもたちは生きものについての知識も豊富です。葉の色の移り変わりや、野鳥の巣づくりや巣立ちなどを間近に見ることで、四季折々の自然の変化を体験から学んでいます。子どもたちが分からないときは、保育者が本などを使って一緒に調べます。天候に対する考え方も変わります。雨の日は、天気の悪い日ではなく、泥団子づくりに必要な水を運ぶ手間が省ける嬉しい日となります。

園児の数は現在 15 名です。現在、さらに 15 名増やして 2 グループにする計画を立てています。子どもの数は 1 グループ 15 名を基本にしています。これは、子どもたちがお互いを認識できる範囲が 15 名だからだそうで、子ども同士のコミュニケーションを十分に図り、相互の理解や信頼を促す目的で設定された数字です。

素晴らしい遊び環境だけでなく、子どもの認識の範囲についても考慮しているこの園は、子どもを通わせている保護者たちから非常に高い評価を得ており、人気があるためウエイティングリストには常に多くの希望者が名を連ねています。

由緒正しい
趣のある園舎（上）と
森の中の門（下）

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

# 森のなかの保育所・幼稚園アンネ・フランク

## 「地域在来の野草とソーラーパネルが同居する屋根」

この園は、ポツダム南東に位置するヌーテタール地区の自治体が運営しています。1969 年に幼稚園として設立され、1974 年に学童保育を開始し、1991 年には保育所が併設されました。1999 年に増改築された園舎は、環境に優しい省エネモデル建築で、自然素材を使い、自然の採光を取り入れるなど、子どもの興味や快適性を重視したデザインとなっています。

屋上には、地域在来の草花とソーラーパネルが同居しています。1ha ある園庭には、野草が咲くエリアや小山などがあり、その外側に松などが生える森が広がっています。木立のなかに設置された自然素材の遊具は、幅広い年齢層に合うよう配慮されています。けがをする可能性のある石なども意識して置かれています。柔らかな光が差し込む大きな窓からは、森のなかの様子がよく見渡せます。

天井まで届く大きな窓からは園庭がよく見えます

屋上の野草とソーラーパネルも雨のなか

この園には、0 歳から 6 歳までの子どもたち 239 名が通っています。安全に自然とふれあえる森のなかの園ということから、ベルリンやポツダムの都市部からの入園希望者が多くいます。しかし、顔見知り同士で遊ぶことで、安心感が得られると同時に自立心が芽生えること、保護者との協力関係も築きやすいことなどから、地元の子どもたちを中心に園児を募っています。

スタッフは全体で 40 名。保育者が 33 名で、技術関係のスタッフは 7 名です。男性スタッフも 5 名います。また、障害の有無を認識した上でその統合を進めるインテグレーション教育に力を入れており、障害のある子どものための特別な教育を受けた保育者が 2 名います。

幼稚園は 1 グループ 24～25 名で、保育者 2～3 名で対応しています。保育所は通常 1 グループ 12 名で、2 名の保育者が担当しています。入園希望者がとても多かった今年は、いろいろな状況を考慮して特別枠として 22 名のグループをひとつ設けて、4 名のスタッフで対応しています。軽度から重度まで、さまざまな障害をもつ子どもたちも 17 名預かっており、それらの子どもたちは、各グループに数名ずつに分かれて入り、他の子どもたちと一緒に遊んでいます。

この園は、「強い子は強く、弱い子に対してはそれを補い、支援する」をモットーに、しっかりと地に足の着いた、飛躍できる人間になってもらうことを目標に保育・幼児教育を行なっています。そして、一人ひとりの特性やニーズに添った対応が可能となるよう、子どもたちの日々の成長を記録に残しています。

視察のはじめには、日本からのグループを歓迎して、「ミツバチグループ」の子どもたちが、ドイツ語の「幸せなら手をたたこう」の歌とダンスを披露してくれました。かわいらしいサプライズ・プレゼントに、一同大感激したことは言うまでもありません。

広い園庭の視察を楽しみにしていたものの、激しい雨が降り出したこの日は、園長のボーム氏に園舎を中心にご案内いただきました。室内には、園庭で集められた自然の材料で作ったオブジェなどが多くありました。大きな窓を通して見える景色は、森のなかの園という名前にふさわしいものでした。子どもたちの最善の利益を優先したこの園の保育・幼児教育について学び、保護者の人気の高さや、入園希望者が後を絶たない理由をよく理解することができました。

Copyright© 2017 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

日本生態系協会では、今後も、自然と文化が共存する美しいまちづくりのシンクタンクとして、自然を生かした保育・幼児教育の充実を支援してまいります。研修会の講師派遣、自然を活かした園づくりのコーディネート、そして個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望に応じて対応いたします。お気軽にご相談ください。

公益財団法人 日本生態系協会

〒171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974
http://www.ecosys.or.jp/activity/tour/